

## 大垣さんの目指されたもの

黒住耐二

大垣さんの訃報は、いくつかの転送メールによって知ることとなった。その後、何名かの方々からのご連絡により、その壮絶な最期をお聞きし、最後まで、あのきちっとした性格のままであったことを知り、より悲しさが増してしまった。

大垣さんとのお付き合いは、大垣さんが学部生の時代からで、私が京大貝類同好会「いそこじき」に入れて頂いていた高校生の頃なので、もう 30 年以上になる。貝類コレクションが全ての当時の私であったので、コレクションとは無縁で、“いい貝”を採集されない大垣さんには、それ程親近感を持っていた訳ではない。

その後、私が琉球大学へ行き、生態学研究室で西平守孝先生や諸先輩方に様々なことを教えて頂く中、大垣さんの「いそこじき」に書かれていた波浪とタマキビの分布・殻サイズや内湾度等の貝類の具体例で示された“総説文”が極めて興味深く、やっと考えておられることの一端を理解しようと言う気持ちが湧いてきた。それからは、帰省の折や貝類学会参加の折に、お話させて頂き、(具体的なことは覚えていないが・・・)有形無形のアドバイスを頂いた。ひとつだけ、「いそこじき」の山本虎夫先生の追悼で、沖縄と紀州の貝の類似を記した駄文(本当に!)に対して、「おもしろい視点だね」と言って頂いたことだけは記憶している。

そして、私が沖縄でアルバイト生活をしていた折の 1988 年、石垣島の八重山農林高校で半年間の補充教員をしており、大垣さんも“浪人として”石垣島白保に長期滞在され、時々お尋ねした。大体研究の話ばかりで、私が石垣島の道沿いに誘殺トラップを設置し、陸産貝類の組成と量を調査していることをお話したら、「そんなことしても、何になるの?」と言われ、“現状を押さえ、今後の変化のデータを取る”と反論した。ただ、この誘殺サンプルは、データになることもなく、完全にお蔵入りで、大垣さんの私への理解の正しかったことは証明された(これも、いわゆる“長期変動”調査だとは、今も思っているのだが)。この頃から、私は貝塚出土貝類の仕事が多くなり(晩年の大垣さんには“考古学者”と認識されていたようでもある:考古学の名誉のため、出土遺物の実測[凶化]もできない者は考古学者とは名乗れないと記しておきたい)、その流れの中で、これまでも知られていたマングローブに生息する大形ウミニナ類のセンニンガイ・キバウミニナ・マドモチウミニナの貝塚出土資料に基づいた時代変遷/絶滅時期の論文を共著で書くことになった。個人的には、大きなネタだと思い、着実にデータを集めており、いずれ形にしたいと思って

いたが、私の能力ではマトモな論文になることはなかったであろうし、発表できたことに今では大垣さんに感謝している。

大したお手伝いはできなかったが、故土田英治さんが学部時代に白浜で得られた手書きのデータをお送りしたり、田辺の沖積層の貝化石の年代測定と原稿に目を通していただいたり、遺跡発掘された貝類資料を年月が経ってから再度見るのは難しいのでは？とアドバイスしたりという感じであった。遺跡の貝にも興味を示されておられ、私もお世話になっている熊本大学の木下尚子先生の高額な大著「南島貝文化の研究」を購入しようかどうか尋ねられたこともあった。大垣さんのような有能な方が、貝塚の貝類研究に来られると、私の居場所がなくなると、実はかなり恐れていたのだが、“生態学者”に踏みとどまられた。

大垣さんの研究の主題は“生物分布の長期変動”であったことは、「浅海生物相の長期変動－紀州田辺湾の自然史」からも、明らかであろう。大垣さんは、“現代生態学的な視点”から長期変動を解析されておられると理解している。しかし、個人的には大垣さんの目指されたものは、“分布学”と言うべきものではないかと思っている。潮間帯帯状構造内でのアラレタマキビの分布・島島でのウニ類の分布・田辺湾浅海域の生物分布・・・であり、ある時点での生物の存在を明らかにし、その存在様式（分布）の変化／変動を、他地域での動態も視野に入れながら、長期間追跡するというものではなかつたらうか。自らは、“生態学者”と考えておられたと思うが、現代の統計とDNA中心の生態学とは、全く異なる“自然史学”に立脚されていたと私には映る。大垣さんは、この現状を批判されることは決してなく、怒られることは明らかだが、学生時代に読んだ奥野良之助「生態学入門」で述べられている状況と類似しているように思えてならない。

ご自身も各所でお書きになられているが、大垣さんのような一地域の“長期変動”を、絶対値として確実に追跡する研究は、今後もほとんど行われなれないと思われる。これからも、多くの科学者が“短期変動”の研究で業績を挙げて行かれるであろうが、大垣さんのような“分布学”の視点からみられることはないであろう。もちろん、一方では“環境変遷”というボーリングコア等の分析による“長期変動”の研究は今後も人間活動と関連させて展開されていくと予想されるが、どうしてもコアの得やすい泥底等の環境に限られた議論になることも予想される。このような現代の科学の置かれている状況下で、大垣さんは、ある種、現在の“科学者集団／研究者サロン”とは距離を置かれていた、とも思える。研究費獲得に窮することもなく、自らの研究視点を実現されていくことだけを目的とされていたと言い切れよう。

研究者サロンの片隅で暮らしており、能力のない私には、大垣さんのような強い意志を持ち、理論的で、かつ統計も駆使される研究は不可能ではあるが、残された遺書とも言えるまとめ「浅海生物相の長期変動－紀州田辺湾の自然史」を座右に置きながら、1 万年間程度の日本を中心とし、南中国海を視野に入れた貝類の“分布学”を見て行きたいと思っ

ている（まとまることはないであろうが・・・）。

大垣さんという、良い（真の？）意味での「竹林の七賢」を私たちは失ってしまった。大垣さんの灯された明りに導かれながら、経路は異なるのかもしれないが、歩いていくしかないのだろう。やはり普通の言葉で、終わるしか私には能力がない。「大垣さん、有難うございました。安らかにお休み下さい。」

（くろずみ たいじ・千葉県立中央博物館）